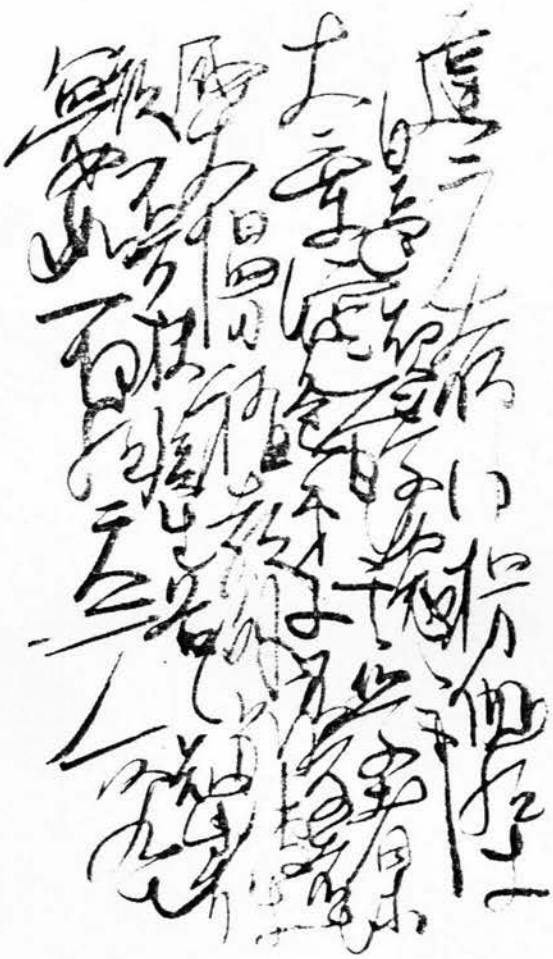
今月の御聖訓



〈達磨大師以楞伽経等、〉

（日蓮が御免を蒙らんと欲するの事を）

日蓮ガ欲スレレ蒙ラント御免ヲ之事ヲ

〈大乗空一分也。其学者等〉

（色に出す弟子は不孝の者なり。）

出レス色ニ弟子ハ不孝ノ者也。

〈成大慢称教外別伝等、〉

（敢て後生を扶くべからず。各々此の旨を知れ。）

敢テ不レ可レカラ扶ニク後生ヲ。各々知ニレ此ノ旨ヲ。

〈蔑如一切経天魔所為也。〉

【真言諸宗違目　一三九頁】

目　次

第二十八回法華講総会特集

住職指導……菅野憲道　2
講演〈「クオリティ・オブ・ライフに思う」〉……赤城法華堂　下道貫法　4
《フォト・アイ》……10
講頭挨拶……尾林弘三　12
祝電……12
所感発表
〈信仰と日常生活〉……幡八重子　13
〈病気と闘う信心〉……田中清子　15
〈恵日の編集を担当して〉……大谷吾道　18
会計報告……20
恵日だより……21
七月の行事　今月の宅お講

表紙写真撮影：松井義信氏　題字：立正安国論より拝写

正しい信心に住して地道な努力を進めよう

第二十八回源立寺法華講総会開催さる

強い雨が降ったり止んだりのあいにくの天候の中、六月十四日（日）午後一時から、源立寺本堂において第二十八回源立寺法華講総会が開催された。

一時丁度に住職の導師で読経・唱題、開会に先立って祝電が披露された後、総会は西村光次さん・井元恵子さんの司会・進行により開催された。

先ず、司会の西村さんの力強い開会の辞に続き、成田詳道師の唱導による「諸法実相抄」のご聖訓奉唱がなされた後、尾林講頭が挨拶に立ち、日常の振る舞いの中で仏法を語っていこうと呼びかけた。次で、佐久間勝治郎さんの活動報告、太田勲さんの会計報告、松井照雄さんの監査報告へと進み、ここで住職より、本年改選となった源立寺総代の認証式が行われた。

認証式の後は、かわいい少年部のコーラスで、「涙くんさよなら」「こどもの世界」の二曲を披露。次で総会は、所感発表へと移った。

まず、板垣真弓さんが登壇者の箕面地区の一幡八重子さんを紹介。登壇した一幡さんは「信仰と日常生活」と題して、普段の生活の中で信仰を子供に伝えていけるよう自身ももっと勉強したいと話され、続いて小山定弘さんの紹介で登壇した庄内地区の田中清子さんは「病気と闘う信心」と題して、ご自身の長い闘病生活とそれを支えた信仰の重要性を切々と話された。次で、岡山市興風談所・大谷吾道師が「恵日の編集を担当して」と題して話された。

ここで、群馬県赤城法華堂・下道貫法師が登壇。師は「quality-of-life（クオリティ・オブ・ライフ）（生活の快適さ）に思う」と題して、最近クローズアップされている終末医療のあり方に疑問を呈し、その根底にあるキリスト教的思想と当家の信仰の違いについて講演された。

その後、住職指導、最後に山本収さんの閉会の辞で法華講総会は終了した。

法華講総会・住職指導

法華講に課せられた使命は重大

住職　菅野　憲道

本日は、第二十八回源立寺法華講総会が盛大に開催されまして、まことにおめでとうございます。

最近、関西の某有名製菓会社が廃業したということを聞きました。その理由というのは、今まで五百億円ほどあった売り上げが半分ぐらいになってしまい、特別に大赤字を出しているわけでもないのに、経営者が採算割れで嫌気がさして廃業してしまったというのです。この話を聞いて、今の日本人のマインドが、非常に消極的で臆病になっているのではないかと思いました。

多くの負債を抱えて、資金繰りに詰まって倒産したというのなら分かるのですが、このような形の廃業は、その先には従業員の首切りや、多くのテナント等の関係者、さらには大勢の小さな子供にいたるまでの顧客の信頼を裏切ることになるのですが、社会的責任とか企業の公共性という事に考えが及ばなかったのかと残念でなりません。色々事情はあろうかと思いますが、最低限、公的責任を感ずるならば、商権を譲るなどして、経済活動を子供や孫の時代までつないでいくように考えていくのが、企業人の社会的な責任ではないかと思うのです。

現在の不況が経済問題ではなく、心理問題であると学者が指摘しているように、やはり日本人一人ひとりが未来に希望や理念を持たなくなっているということが、非常に大きな原因になっているのではと思います。

裏を返せば、一人一人が皆自分のことしか考えず、ある程度の財産を貯め込んだから自分の老後だけは大丈夫だ、アトは世の中がどうなろうと知ったことではない、自分だけは食べていけるといった、どうも立派とはいえない心掛けを持つ人が多くなってしまったからではないでしょうか。

未来のため、理想のため、社会のため、一生懸命努力する人が段々少なくなって、低次元な個人主義、エゴイズムが横行しているところに、今の不景気の真因があるように思うのです。

さらには、今世の中を取り巻いている地球の温暖化現象とかダイオキシンのような環境汚染問題や、またインドとパキスタンによる核実験のような、核拡散という深刻な問題、これは北朝鮮や中東の国々、さらにはテロ集団が核を持つにいたるということも、この先には考えられるのであります。

こういう社会を取り巻く閉塞状況も、結局その根底に根ざしている現代人の宗教・思想・哲学に深くかかわることで、人間自身に内在するエゴイズムという問題に帰着すると思うのであります。

結論からいいますと、個人レベルの問題も、国家社会レベルの問

題も、人類でのレベルの問題も、その根底にはエゴイズムが流れているのでありまして、仏教で言うところの煩悩濁、見濁、命濁、劫濁、衆生濁という、汚染され、荒廃した人間の、内面を浄化する運動こそもっとも重要なのではないでしょうか。

今の社会を取り巻く種々の難問も、所詮は正しい宗教、正しい仏法によって、人間のエゴイズムを克服する以外に、本当の解決の道はないということを、法華経と大聖人がお示しになられているんだと思います。

法華経に説かれる十界互具、一念三千の法門は、人間の独善的な生命、あるいはエゴイズムの生命を打ち破って、真の人間の浄化＝六根清浄をめざすものであり、皆んなが心の底から安心して住めるような、共存共栄の寂光土を願って、大聖人は「立正安国」の行動を起こされたのであります。

それゆえ、我われ法華経を信仰する者は、自己中心的な欲心を満たすために生きるのではなく、むしろ小さな自我の殻を打ち破って、世のため法のためという大いなる志を持って精進することが、一番重要なことだと思うのであります。

法華講の使命を訴える菅野住職

ところがこの仏法をはき違えた、宗門や創価学会が、広宣流布という美名に隠れ、自己の教団の発展だけを願ってなりふりかまわず教勢拡大に突っ走ってきましたから、その行き着いた先に今の混乱状態が待っていたのであります。特に、正本堂解体の問題は、少なくとも戦後五十年にわたって進めてきた折伏闘争とか、広布路線がまったく的外れの宗教運動だったことを示しております。

我われの正信覚醒運動は、二十年以前に、このような事態を予見し、その反省の上に立って、正しい信心のあり方を求め、真の日蓮大聖人の仏法を研鑽するとともに、正しい信行学の運動を合言葉に実践してきたのです。

そして今日のような状況を見聞するにつけ、数は少なくとも志を持った人々が、主体的にまず自身の使命を明確にし、自行化他の両道を自覚的に実践して行くべき時が来ているのだと痛感します。

何気なしに源立寺にお参りされている方も、もっと広い視野に立つならば、わが法華講中こそ、真の法華経の精神、大聖人の仏法をもって道を切り開き、時代の暗闇の中に、明々と灯明を掲げられるような講中に成長するよう願って唱題して頂きたいと思います。

宗開両祖の真の精神を受け継ごうという源立寺法華講の使命は重大なものであります。地道に、また着実に、精進しましょう。

特に、ご自身のいろいろな悩みや困難なことを抱えて信心されている方もございましょうけれども、はやく難問を克服されて、少しでも多くの方が自分の荷物を背負うだけではなく、多くの人々の荷物も一緒に背負っていけるような、丈夫の心をもってご精進下さるようにお願いする次第であります。

法華講総会講演（要旨）

クオリティ・オブ・ライフに思う

赤城 法華堂　下 道 貫 法

源立寺法華講の皆様、本日、平成十年度法華講総会が盛大に開催されまして誠におめでとうございます。私は 群馬県赤城山の麓におります赤城法華堂の下道貫法と申します、どうぞよろしくお願い申し上げます。

源立寺様には思い出がございまして、私事で恐縮ですが、私が昭和五十五年十二月に塚本の蓮華寺から、群馬県に新しく布教所を作って移る時に、ご挨拶に伺ったのがここ源立寺であり、菅野憲道ご尊師でありました。その時色々なお話と共にお米とカップヌードルとお寺の説法台掛けなどをいただきまして、ジープに乗って赤城山を目指したのでございます。その時のことは今尚大変ありがたく深く感謝いたしております。「いよいよこれからが本番だ、山の中で一人で『上求菩提』の志を大事にがんばろう」と思ったものでございます。

新天地ですから初めは信者さんは一人もおりませんでした。しかし、どんなことがあっても道心を失わなければ仏天のご加護が必ずあるということを体験させていただきました。

お陰様であれから早二〇年になろうとしております。思い返しますと実に色々な方々から心を寄せていただきまして、感謝のことばもありません。「上求菩提」の志は変わらないものの、勉強の方がなかなか進まず弱っております。

その後、思想の違いからこの源立寺をお尋ねした人々を、源立寺さんは快く受け入れて下さったことをあとで知り大変感謝した次第です。また阿倍野の広宣寺さんにもお世話になったことと思います。この場をお借りして、彼の寺院にいた者として今改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。私は久保川法章師の論説は一種の学術研究と考えており、師に限らず学術研究とその発表は基本的に自由であると思っております。また久保川師は私にとって得度の師であります。その報恩のためにも、

「夫れ出家して道に入る者は法によって仏を期するなり」（「立正安国論」）

のご文に随い、私はますます「依法不依人」を堅持し、ますます大石寺法門の研鑽に精進しなければならないものと思っております。

《クオリティ・オブ・ライフとは》

さて、本日は講演という立派なことは出来ませんが、思うことをお話させていただきたいと思います。

最近テレビ・ラジオ等で「quality-of-life（クオリティ・オブ・ライフ）（生活の快適さ）」ということが言われております。これは日本人の平均寿命が延びたことによってクローズアップされた言葉であるそうでございます。「生活の快適さ」と申しますのは、ここでは「人生を質的に見て上等に過ごすこと」という意味で使われております。

平均寿命が延びたことは結構なことでございます。平均寿命が延びた理由を考えますと第一に、生活が豊かになり、人々は働く傍ら余暇を考えるようになったこと。第二に、医療の発達ということがあると思います。

性能のよい機械や薬、そして医療技術もグッと上り、人体の内臓も切ったり繋いだり、あるいは新しい臓器と取り替えたり、今まで難しかった病気は次々に治してくれます。その結果として日本人の寿命はグングン延びて大変結構なことになりました。

講演される下道貴法師

しかし、その反面、単に長寿を喜んでいるわけにいかないこともあります。それは、病院のベットの上で、点滴や酸素など沢山の管で繋がれている長寿の方も数多く見受けられます。ベットの上で寝かされている人々の中から「我々はこのままでいいのだろうか」という現状に対する疑問が起こってきました。そして「もっと内容をもって生きたい」という意見が出て、更に「少しぐらい寿命が縮んでも、自分の生きてきた証として何かを成し遂げたい」とか「高級な延命処置を受けることをやめて家に帰ろう」とか「心安らかで、清々しい毎日を過ごしたい」と願う人が増えてきたといいます。

それでどうするかと申しますと、外国の考えを導入しまして「良い本を読んだり」「良い音楽を聞いたり」「美しい景色を眺めたり」、症状の重い方は医療チームと相談しながら、「宗教家の説法や会話を聞きながら過ごす」ということをするのだそうです。

こういう過ごし方を「クオリティ・オブ・ライフ」というのだそうでございます。ほかにも「ホスピス」とか「緩和ケアー」というメカニズムもあるといいます。

私は医療の専門家ではありませんが、テレビ・ラジオで見聞する範囲では、なる程これは大切なことだなあと思いました。そして「充実した自分を生きること」を考え、「人生の締め括り」を考えるという意味では、人院している人に限らず、人間誰でもが考えなければならない問題であると思うのでございます。

《基盤になっている後生成仏》

本日は、この「クオリティ・オブ・ライフ」ということを題材にしながら富士門流の教えというものを確認してみたいと存じます。

今も申し上げましたように、「クオリティ・オブ・ライフ」ということは、人生の締め括りを考えるとか、充実した自分の生き方を考える、という点において大変結構であると思います。そして今、日本の医療もこうした外国から来たこの「クオリティ・オブ・ライフ」ということを取り入れようとしております。

しかし、外国の考え方をそのままいただくには不自然であるように私には思われます。何故ならば、これは外国の生活習慣や宗教観が基本となって出来たものですから、日本とは風土や宗教意識が違

いますから日本には馴染まないように思うのでございます。

先ず第一に、先程の中に「宗教家の説法を聞きながら過ごす」とありましたが、外国の人はキリスト教の牧師や司祭の話を聞いて本当に安心できるのかどうか知りませんが、ここに私は疑問を感ずるのでございます。キリスト教は、「この世の中は神の意思によって動いていく。随う者は天国に生じ背く者は地獄行きだ」と説くわけです。死後に神の国・天国に生れることが出来ると説きます。そこはユートピアであり、赤ちゃんは「生」まれない、「年」は取らない、「病」も「死」もない、動物も人間も仲良く暮らし、「諍い」はなく楽しい処であるというのです。それでは、目に見えない神の意思というものはどのようにして決めるのでしょうか、これが判りません。また、死後の天国、これは浄土宗に「厭離穢土・欣求浄土」と説き、死後の極楽浄土に生まれることを本願とする考え方がありますが、これと同じであります。こういう考えを「後生成仏」といいます。

欧米人の多くは「財産と名声」を社会的地位の、あるいは人間評価の基準と考えます。特にアメリカは自由の国と呼ばれそれが顕著ですから、典型的な現実主義なはずです。それが、現実には存在しない死後の天国や浄土の話を聞いて、心から安心するとはとても信じられない気がいたします。

もう少しいえば、元々キリスト教の聖書は「ユダヤ人だけがこの世で優れており神に選ばれた民族だということを書いたものである」と言われております。それでは具合が悪いといって、後世の人が何年もかかって何回も書き換えてきているわけです。それぞれの解釈に支持者がいて、ついに一三〇派を越える教団となっているようです。聖典としているものを次々に書き換えることにも問題があると思いますが、それはともかく自分たちだけが優れていて神から選ばれていて他の人は見捨てられた民族だというのでは、これは他の民族に宣戦布告しているのと同じわけですネ。これでは他の民族は黙っているわけにはいきません。この点イスラム教も同じです。ですからこういう宗教のある所はいつでも人と諍い、血を流すことになるのです。そして相手が大きなダメージを受け弱った時に、食べ物や着る物を与えて「博愛」をアピールする光景を屢々見聞しますが、この一連の動きは全く独善としかいいようがありません。

独善を敷いておきながらその責任をとらず、剰え、死後の楽園を約束するということは、指導者が信者に使役せしめた代価をたった一枚の木の葉で贖おうとするのと同様です。信者はもっと賢くならなければなりません。指導者の欲心や、物事の本質を見抜かなければなりません。キリスト教やイスラム教を信ずる人を含め欧米の人々は自分の大切な「人生の締め括り」をこのような独善の思想に託して本当に安心できるのでしょうか。

《後生成仏と当家の即身成仏》

この「後生成仏」という点について大聖人様の仏法ではどのように示されているのでしょうか。

それは、「上野殿後家尼御返事」によって学ぶことができます。

「夫れ浄土というも地獄というも外には候らわず。ただ我等が胸の間にあり。これをさとるを仏といふ。これに迷うを凡夫という。これをさとるは法華経なり。もし然らば法華経を持ち奉る者は地獄即寂光とさとり候ぞ」（全集一五〇四頁）

とございます。「浄土も娑婆世界も、全て自分の心の中にあるのである。現実を離れたどこかに安住の地を求めてはならない、現在の

自分自身を直視しなさい。」と仰せられています。つまり、大聖人様は「後生成仏はいけない、即身成仏でなければならない」と仰せになって、即身成仏という妙法を示され、現実のこの世における成道を可能ならしめたのでございます。

後生成仏はいけないと申しますと、大聖人様は三世の生命ということを説いておられるではないか、という方もあると思いますが、勿論それはその通りです。三世の生命を説いておられます。けれども、同じ御書の中にこういっておられます。

「世間の習いとして三世常恆の相なれば、歎くべきにあらず驚くべきにあらず」

と。また、

「妙楽大師云く、伽耶を離れて別に常寂を求めん。寂光の外、別に娑婆あるに非ず」

「又云く、実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土なり」

と。これは、南条時光殿の母上に宛てられた御書で、時光殿の父上が亡くなられて母上が非常に悲しんでおられた時です。大聖人様はご慈悲をもって優しく激励されています。

開所当時の赤城法華堂（その後増築された）

――ご主人はあの世に発たれた、死後の別な世界に行ったんだと思われるでしょうけど、そうではないのですよ。未来の世界に行ったのだというのは、世間の常識として過去現在未来の三世ということをいうのだけれど、歎くことはありません。

法華経方便品に「是法住法位・世間相常住」とあるように、十界十如の命相はそのまま真理なのだと説かれているのです。教主釈尊だって過去現在未来の因縁を色々説いているけれど、詰まるところ、娑婆世界にあって法華経によって八相成道を遂げたのですから心配は要らないのです。それにご主人は法華経の行者の日蓮の大檀那であったではありませんか、必ず即身成仏を遂げております。いつまでも悲しみ・歎くには及びませんよ。相思相愛の奥様の胸の中にご主人は生きておられるのです。奥様が心を励まして、法華経の信心によって即身成仏を遂げるならばご主人も即身成仏するのです――

大体意訳しますと以上のようなことになろうかと思います。過去現在未来の三世は、仏教理論として成り立つことですが、末法の法華経信仰としては後生成仏ではなく、即身成仏にその成道観があるということを学ぶことができるのであります。

日有上人は、

「この経の印によって後生成仏なりという事心得ず。仮令世間通法の言葉なればこの経を受持申してより信心無二なれば即妙法蓮華経也。即身成仏とは爰本を申す也」

（「連陽房雑々聞書」歴全一―三七七頁）

と大聖人様と同じことを仰せになっておりまして、富士門流は大聖人様の御意をそのままに継承していることがよく分かります。

《真実の平等思想と事行の自主性》

第二に、教えに「一切衆生の平等」が説かれてあることが大切でございます。彼のキリスト教・イスラム教等の余教は「宗教の中に差別」がありますが、大聖人の教えは、世間は差別・仏法においては平等が説かれております。一切衆生悉有仏性、一切衆生は十界互具して即身成仏を遂げるという、真実の平等観が説かれています。

第三は、修行に就いてであります。キリスト教系では、人間は初めに原罪という罪があって「罪は人間的努力で乗り切ることはできない。犯した罪への悔い改めしか道はない」として懺悔が唯一の修行であるといいます。これは一方的に救われるのを待つだけの受け身の態度で神と民は隔絶しております。かなり盲従を強いられた絶対依存の姿勢であります。大聖人の仏法においては、能動的な「信」の発露として受持という修行を説いております。妙法蓮華経を無上にありがたいという気持ちをもって信受し、自らの仏性を薫発して本法の題目に同化するという、法門に則った修行を行なうのでございます。そうでなくては事行の妙法、「即身成仏」は得られないのでございます。

以上のように、現実世界の成道観、真実の平等思想、事行の自立性が説かれている教えでなくては信頼に足りる宗教とはいえないのでございます。この信頼に足りる教えに先ず帰依し、その上で「良い本」「よい音楽」「良い景色」とともに過ごすのであれば、本当の意味の「充実した自分を生きる」あるいは「人生の締め括り」が成就出来るのでございます。

「クオリティ・オブ・ライフ」は、ケガや病気に罹った時に出てくる「助け船」としてあるようですが、ケガや病気そして健康という何なる現象にあろうとも、人生全体を真面目に考えて生きるということが大切ではないかと思うのでございます。

今地球上いたるところに戦争が絶え間なく起っておりますが、戦争は皆独善の所産です。戦争の当事者は、現実世界において独善の極みを尽くし殺戮を行っているのですから、因果の理法によって現実世界において厳然とその報いを受けねばなりません。人生の収支決算は必ずくるということを知るべきでございます。

このような悪世末法において、諍いを収束するためにはやはり仏教でなければなりません。「怨みは怨みによっては鎮まらない。怨みを忘れてこそ、怨みは鎮まる。」という言葉がありますが、これらを実践していく外に道はないように思います。

熱心に聴聞する参加者

《私の体験》

ところで、先程は素晴らしい体験談・決意発表を伺いましたので、私も体験談を申し上げたいと存じます。私の近所にS氏という人が住んでいますが、S氏は早稲田大学の大学院を首席で卒業したという五〇才位の紳士です。いつの間にか私と仲良しになり、興が乗ると夜通し話をすることもあります。何気ない話の中に「日蓮大聖人様の国家諫暁は私利私欲では出来ないこと」とか「富士日興門流の信仰は志を大切にしていること」とか「行き倒れのよう

な人は弔ってやりなさい」という教えがあること等を話しておりました。

ある日、神戸のドック王と呼ばれていた父上が亡くなられました。茫然自失のS氏は、現場の葬儀等待った無しの一連の処置を済ませてから、妙法蓮華経の教えを思い出しまして、すっかり闇夜に光明を得た気持ちになりました。神戸から帰ってS氏は私に向って「私はあなたに帰依します。」というのです。私はこの言葉を聞いて「これはえらいことになった」と思いました。正直いって戸惑いました。けれども、私は気づくのが遅かったのですが、S氏は一〇年に及ぶつきあいの中、富士日興門流の話が好きになっていたのです。そしてご自分ではすっかり法華堂衆の一員と思っておられたようです。次の瞬間、その様子が判ったので私は富士日興門流の代表としてS氏の気持ちを崇高なものとして受け止めるべきだと思い直したのでございます。

もう一つ、神奈川県に住む裁判所のY判事さんの話です。各地の裁判所を歴任し、数々の訴訟を見事に裁いてこられ、退官後叙勲を受けられております。二十数年来親交のある先程のS氏の一言によって、菩提寺である曹洞宗の大寺院の墓地と大檀那の地位を振り捨てて、法華堂に帰依することになったのでございます。

赤城に行ってほぼ二〇年　名聞名利に無関係に大石寺上代の教えを求め、おおらかにボンヤリ過ごさせていただきましたが、ポツリポツリとこうして日蓮正宗の信仰をしたことのないお方が、大聖人の仏法に帰依する機会に立ち会うことができまして、とてもありがたい気持ちでございます。

以上私の体験談をご紹介させていただきましたが、それまで信仰を考えることがなかったS氏やY判事が「好き」になり帰依したように、富士門流の信仰には素晴らしい魅力があるのでございます。真の平等思想、即身成仏の法が息づいているのでございます。

どんな傷も癒してくれる暖かな妙法の泉、慈悲の泉というものが富士門流の法門には涌き出ているのでございます。この妙法の泉に浴しながら人生を生きる時、法悦に満ちた人生を築くことができるのでございます。

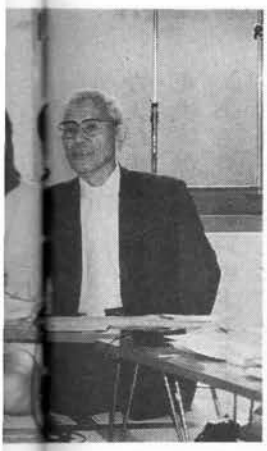
「人身は受け難し、爪の上の土。人身は持ち難し、草の上の露。百二十まで名を腐して死せんよりは、生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ。」（「崇峻天皇御書」全集一一七三頁）

大聖人様は、この世にせっかくいただいた命は、徒らに長らえることよりも仏教の教える所に随って、たとえ一日なりとも内容をもって妙法のままに生きることが大切であると仰せになっております。

私たちが毎日生きているのは何のためかというと、畢竟、「毎日ありがたいお題目を唱え、法悦をいただき、毎日魂を蘇らせ、新しい自分を生きる」ということに尽きるのではないでしょうか。つまり「毎日自分がより善く変わっていく」という処に生きる悦びがあるものと思うのでございます。

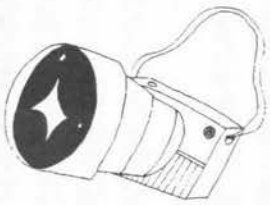
源立寺法華講の皆様におかれましては、今後もどうか大聖人様の教えをできるだけ多くお聞きいただきたいと思います。そのためには、源立寺の行事には必ず参詣されて、菅野ご住職の法話を沢山ご聴聞いただきたいと思います。また執事の成田詳道ご尊師の法話を沢山ご聴聞いただきたいと思います。それをご自分の人生に活かして、堂々たる人間完成を目指していただきたいと存じます。

皆様、どうぞご健勝でますますご発展下さいますようお願い申し上げます。言葉が整いませんが、これをもちまして私の話を終りたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（了）



司会・進行の
井元さん、西村さん

フォト・アイ
《法華講総会》



会計報告
（太田さん）

らか年部コーラス）

活動報告
（佐久間さん）

会計監査
（松井さん）

新総代の認証式

力強く田中さんを紹介
（小山さん）

歌声も高

閉会の辞
（山本収さん）

幼なじみの一幡さんを紹介
（板垣さん）

発表者に惜しみない拍手が送られた

【講頭挨拶】

活動大綱の実践を

講頭　尾林弘三

本日は、第二十八回源立寺法華講総会をこのように盛大に開催することができ、心よりお祝い申し上げます。

今年の活動大綱、

「法統相続と青年の育成」

「確実な勤行の励行とお講参詣」

を掲げて、早五ヶ月が過ぎました。

私たちの信心の目的は成仏であります。信心修行の内「勤行の励行とお講参詣」は、ある程度実践されていますが、「法統相続と青年の育成」は、あまり進んでいないのが現状であります。

先ほど皆さまと「諸法実相抄」を唱和いたしましたが、

「我もいたし人をも教化候へ」

「力あらば一文一句なりとも語らせ給うべし」

自ずから日常の振る舞いの中で示し、時にふれ仏法の話を語っていっていただきたいと思います。

五月十七日の正信会全国法華講大会で、「正直の宗旨」と題して菅野ご住職がご講演下さいました。六月一日号の継命新聞にくわしく掲載されております。よく読んでいただきたいと思います。

私たちは、正しい仏法を根本に生きてゆくことが最も大切です。

皆さまのさらなるご精進をお願いして、挨拶とさせていただきます。

挨拶される尾林講頭

祝電

第二十八回源立寺法華講総会が盛大に開催され、誠におめでとう御座います。講中の皆様には護法の師、御住職の御指導の下、身は宗門の外にあっても、本当の富士の本流を担っているのは我々だという、強い自覚と使命のもと、堂々とした信心で、初心を貫こうではありませんか。益々のご発展と、正信覚醒運動のご精進を心よりお祈り申し上げます。

広宣寺住職　簗瀬明道　広宣寺法華講

ご住職指導の下、盛大なる総会、心よりお喜び申し上げます。今、世の中は世紀末現象の情況にあり、人心の荒廃その極に達し、若者・青少年の荒れ様は、目を覆うばかりです。今こそ私達の出番ではないでしょうか。ゆっくりのんびりは出来ません。覚醒運動初期の息吹きに燃え、更に立正の実をあげて下さい。貴講中の彌々ご発展を念じ上げ、お祝い申し上げます。本日は誠にお目出度うございます。

普妙寺住職　石川広覚

立夏の候、第二十八回源立寺法華講総会が盛会裡に開催されました事、衷心よりお祝い申し上げます。御開山日興上人の精神をまなび我等こそ富士の本流の実証を示し、御住職の御指導のもとに団結をされて、益々の御興隆をお祈り申し上げます。

普妙寺　法華講

第二十八回源立寺法華講総会、誠におめでとうございます。御住職の御指導のもと、異体同心の信心に精進され、今後ますますのご発展とご多幸をお祈り申し上げます。

妙海寺住職　岩島行道

【所感発表】

信仰と日常生活

箕面地区　一幡八重子

こんにちは。初めまして、とご挨拶させていただける方から、ご無沙汰してますという方まで、久しぶりにお会いできて、とてもうれしく思っています。

私は今から二十二年前、小学校の六年生の時入信いたしました。この源立寺で御授戒を受けたのですが、幼少の頃より、祖父母の元で生活していましたので、別に暮らしていた母が信心していたことも知らず、仏壇もなかったので、突然のことで、本当に何が始まるのだろうと思ったものでした。

しかし、当時の私は、子供ながらもなにかとても大切なことだと感じ、時々忘れたりもしながらも一生懸命勤行していました。

私の母は昭和六十三年一月に他界しましたが、その時に遺品を整理していると、元気だった頃に書いたと思われる遺言状が出てまいりました。

そこには、自分にもしものことがあった時には、必ず正宗のお寺の葬式で送ってくれるように頼む、と書いてあり、残る私と弟には、生涯正宗から離れることがないように、そして、御本尊様をずっとご安置しておくように、と書いてありました。

弟は私より十三歳も歳が下だったので、当時まだ十歳でした。弟には将来医者か弁護士になってくれ、という希望が書いてありましたけれども、まあちょっとそれは無理だったので、弟は今農業に興味を持って、その道の勉強をしながら農家で働いています。

今はもう全然親孝行も出来ませんが、こうして信心することが最高の親孝行になると、私は信じています。

母の生涯は大変短かったけれど、波乱の多い、人の何倍も生きたような人でした。お陰で私までいろんな経験や、しなくてもいい苦労もしましたが、今となってみれば、それもとてもよい勉強となって、今に活かされていると思っています。

当時私の心の中は、母への恨みや憎しみで一杯でした。本当に辛くて、希望のない毎日でした。もう生きているのもいやと、ひどく暗い心をしていましたが、それでも勤行は欠かしませんでした。早朝に仕事に行くときも、深夜に帰宅しても、必ず勤行していました。

思えばあの時、勤行している時だけが唯一一人になれて、自分のためだけに時間を使えるときで、重く暗い心が少し軽くなって、自分を取り戻せるようでした。心を空っぽにしてすべてを忘れられる瞬間でした。きっとあの時、信仰がなければ、今の私はもっと違った方向に行っていたと思われます。

あのころは、今の生活を変えて欲しいとか、助けて欲しいとか、幸せにして欲しいとかの願いは全然なくて、勤行という自分の修行を止めてしまうと、もう私が私でなくなるような悲壮感があって、毎日ただただがむしゃらという感じで勤行していたように思います。

今すごく穏やかな気持ちで、生きている

だけでありがたいと思えるのも、あの数年間を信仰に支えられたからだと、自信を持って言えます。

三人の子供の母になり、子供が無事大きくなることが一番の願いとなりました。子供も病気がちな私の身体を気遣ってくれたり、子供の笑顔で元気になれたり、何気ない日常を楽しんでいます。そう思うと、母は女性としてはとっても幸せな人生だったかも知れないけれど、母親としては淋しい人だったのかも知れないと、今頃やっと分かったような気がします。

発表される一幡八重子さん

日々子育てをしていて、子どもは自分の子どもであっても、自分の思い通りにならないなあ、と実感することがとても多くあります。

でも、自分で考えて行動し、自分で決めたことならば責任をとることと言って聞かせています。そして自分一人で大きくなったのではないということと、ご先祖さんがあっての自分たちであるということ、だからご先祖さんを大切に思い、感謝する心を持つことを常々言って聞かせています。

祖父母たちの命日はもちろん、お盆やお彼岸には必ずお寺に参詣し「こんなに大きくなりました。いつも見守ってくれてありがとうございます」と、感謝を皆んなでしています。

はじめは、お寺に行くと言うと「えーッ」とか言っていた子供たちが、異議を言わなくなって、頑張って最後まで正座をして、小さな手を合わせてくれるようになりました。本当にうれしく思っています。強制しなくても、親のいつになく真剣な語り口や態度で、子どももこれは大事なことなんだなと、少しずつ分かってくれているようです。

私が今大津でお世話になってる仏世寺のご住職が、以前講話の中で「皆様の両肩には仏様のお使いの方がいらして、目には見えないけれど、皆さんのやっていることや、言ってることをちゃんと見ておられ、悪いことをするとお使いの人が逐一報告をし、仏様の許にあるコンピューターにインプットされる」というようなことを話されました。子供にはそれがすごく印象に残ったようで、悪いことをすると大変なことになると思ったようです。

私も、私自身お婆ちゃん子だったので、昔は、嘘つくと舌抜かれるとか、悪いことすると地獄に行くよ、というような誡めのことを言われて、何となく怖かったような記憶がありましたが、今の子ども達にとっては、地獄の閻魔様と言っても、テレビゲームの敵のキャラクターぐらいにしか思えないようで、説得力がなかったようなんですが、コンピュータにインプットされると聞いて驚くっていうのが、いかにも今風だなと思いました。

誰も見てないから少しぐらいいけないことしても平気という気持ちが、お姿は見えないけれども、誰かが見ている、または見守って下さるという、なんか変な表現です

けれども、無意識の中で意識するということで、誡められたり、反対に安心できたりする気持ちも忘れたくないと思っています。

朝目が醒めたら「今日も一日、よい一日でありますように」と祈り、夜はたとえ嫌なことがあっても「今日も一日無事に過ごせました。ありがとうございました」と感謝できる毎日が、とても幸せなことと思います。

自分や家族に災いがあれば、助けて欲しい一心で手を合わせることになりますが、無事に過ごせるだけで、本当にありがたいことだと思います。ただひたすら御本尊様に、和やかな気持ちでお向いし、いつまでもご安置させていただける環境でいさせていただきたいと、毎日お願いしています。

近い将来、子供と勤行できるのを楽しみにし、子供にももっと大聖人様のことをお話しし、もっと教えて行けるように、私も勉強していかなければならないと痛感している次第です。

最後に、私がこのように信仰について、また再度考える機会を与えて下さいました成田尊師を始め、青年部の皆さんに感謝したいと思います。ありがとうございました。

【所感発表】

病気と闘う信心

庄内地区　田中清子

こんにちは。庄内地区の田中清子です。よろしくお願いします。

私は、昭和五十年頃から両手の第一関節の痛みを覚えるようになりました。当時縫製の仕事を長くしておりましたので、使い傷みかなと自分で思っておりましたが、日に日に痛みが厳しくなり、病院で診察の結果「多発性関節リューマチ」と診断されました。

それでも、治療といっても痛み止めと薬しかなく、それをしてもらいながら当面は仕事に行っておりましたが、日が経つにつれ痛みが激しくなりとても仕事ができない状態でしたので、仕事を辞めることになりました。それでも一日一日と進行し、今度は手首・肘・肩とリューマチがまわり、そして、顎にまでまわる状態になりました。その時はもう七転八倒の苦しみでした。そんな時主人が、そばにいてもどうしてやることもできないと、共に涙してくれたり、たまりかね題目を唱えてもくれました。

「頑張らなければ」と思いながらも、あまりにも痛みが厳しく、頭が狂いそうになりました。その時、このまま息が切れてしまえばと、幾度思ったか分かりません。

そんな苦しんでいる時、知り合いの人から「漢方薬を飲んでみたら。」と言われ、その漢方薬の薬局を紹介して貰い、そこへいったところ、四・五㎝の本を出してこられましたが、そこには治った人たちの住所・氏名が書かれていました。それを信じ、毎月十三万六千円もするという、私にとっては高価な薬代でしたが、主人が「治るものなら飲んだらいいだろう。」といってくれたので、飲み続けました。

その薬は一年余り飲んだと思いますが、一向に良くならず、痛みも厳しく、本当に辛い毎日でした。台所に立っても、長く立

っているのがとても辛く、物を落としてみたり、ふきんも絞れなくなってしまった自分なんです。

そんな状態で数年が経ったのですが、余りにも辛いので、主人に「自由にしていいですよ。私は一人で生きていけるから。」と言いますと、主人は「何を言っているんだ。心配しなくていいよ。自分を治すことだけを一生懸命やればいい。」「もし私が車椅子生活になったらどうするの。」といったら、「何も恥ずかしくはない。わしが生きてる限り押してやるよ。」と言ってくれました。

そして、痛い痛いの毎日でしたが、人に会えば明るく振る舞い頑張ってきたのですが、漢方薬も効かず、両足の十本の指が重なり合って、足には大きな骨が出、どうしようもないところまでいきました。

そんな時友だちに、病院を変えてみたらと言われ、五十九年十月南大阪国立南病院を紹介してもらいました。

診察の結果、先生は「もうあなたの両手首・両足の足首の骨は、もう潰れているよ。」といわれ、精密検査の結果血液にリューマチ反応が出ました。先生は、「これではいけないね。早く手術の手続きをしようね。」と言われ、入院の手続きをしましたが、部屋が空いていなかったのでいったん帰宅しましたが、空いたとの連絡にすぐ入院しました。

そして、両足の手術を受け、一応十本の指を串指しにし、裏の大きな骨も取ってもらいましたが、病室に入った時先生が「うまくいったよ。」と言われた時は、「ご本尊様ありがとうございました。」とベットの上で、お題目を唱えました。

田中さんご夫婦

そして三ヶ月が過ぎ、無事に何とか歩ける状態にまでなりましたが、リューマチというものは、たとえ手術をしても治るものではありません。また痛みとの戦いでしたが、血の流れの良いものをと、特に食事に気をつけて頑張りました。それが平成三年まで続きました。

ところが平成三年十二月、私の不注意から股関節を折ってしまいました。同じ病院でレントゲンの結果、「普通なら人工関節にしなければならないが、あなたの骨はまだ丈夫だよ。」といわれ即座に手術を受け無事終えた時、病室で先生は「あなたは複雑骨折といい、骨の中の骨を折っているんだよ。だから、血液が一番通いにくいところを折ってしまっているので、たとえ今治っても腐るおそれがある。」と言われました。そういう例がいくつもあったそうです。

それからは、我が身の罪業をご本尊様に詫び、「ご本尊様、本当に済みませんでした。自分勝手なことばかりしてきて。どうぞ、歩ける状態にして下さい。」と願い、題目を唱えた結果、四ヶ月余りで退院することができました。

退院してからは、先生が一年・三年・五年と年月を切られ、それを過ぎれば大丈夫だと言われていましたので、歩かなければ

ならないと思い、五年間というもの、一層血の流れの良いものをと、食事にもすごく気を遣い、神経をすごく注いで毎日を暮らしました。

こんな中にも講の方が、いろんな時に激励に来てくれ、自分が買いにくいものは買ってきてくれて、助けてくれました。本当にありがたく思っております。

六年目に入った時、先生にそのことを報告したところ、先生は「よかったね。」といわれ、食事療法のことも話したところ、「それなら、もう大丈夫だよ。」と先生は言われました。

そしてまた、リューマチの痛みとの戦いです。平成六年、突然背中と腰の痛みがおそいました。七転八倒のもがき苦しみでしたが、主人も仕事に行っていたのでどうすることもできず、痛みに苦しみながら、「ご本尊様、助けて下さい。」と願い、私が入信以来苦しいことがあった時に支えにしている、

「一生はゆめの上、明日をごせず。いかなる乞食にはなるとも、法華経にきずをつけ給ふべからず」（全集一一六三頁）

とのご文を思い浮かべ、「いけないんだ、自分が間違っている。ご本尊様に傷を付けてはいけない。治らなければ。」と思いました。

夕方に少し痛みが楽になった時、ベットからそっと足を下ろし、立とうとしましたが立てません。おかしいと思い、いったんベットに足を戻し、自分の足を触ってみたところ、全然感覚がありません。これはえらいことになったと思いながらも「ご本尊様、私の罪業を気づかせていただきありがとうございます。私は病気には負けません。絶対歩いて見せます。」と、自分に言い聞かせ、

「病によりて道心はをこり候なり」（全集一四七九頁）

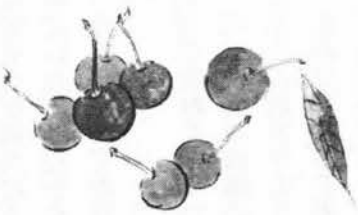
とのご文をまた思い、頑張ろうと思いました。

そして、主人に付き添ってもらって病院に行って診てもらった結果、脊髄から腰の変形性のしびれでした。しびれというものは、いったんしびれれば中々良くなりません。というのも、自分が入院していた隣のベッドの人が、足がしびれて腰が痛いとわめき続け、いろんな精密検査の結果も良くならず、他の病院に送られ、そして他の病院でも良くならず、寝たきりの状態だとも聞いていたからです。それを思うととても辛かったです。

先生は、ただ安静にしてよく寝るしかないといわれましたので、入院したところで良くならないと思い、いったん帰り、ご本尊様にひたすらお願いし、お題目を唱えさせていただきました。その結果一日一日と、薄皮がはがれるように、どうにか歩けるようにもなり「ご本尊様、ありがとうございました。」と、またお題目を唱えさせていただきました。

今はまだまだハンディの大きい私ですが、正信の信心につかせていただいたお陰で、こうして、ここまで来れました。今後何事も、善知識にとり、そして大聖人様の仰っておられる「心の財（たから）第一なり」とのご文を自分のものにして、気持ちをきれいに持って、信心に邁進していきたいと思います。

簡単ですが、ありがとうございました。



恵日の編集を担当して

興風談所内　大谷吾道

私が編集を担当させていただいております『恵日』も平成七年三月号の創刊から、この六月号で丸三年あまり、早通巻四〇号を迎えることができました。これも偏えに皆さま方のご協力たまものと、深く感謝いたしております。

ご住職より、源立寺の山号から名前を戴いた月刊の寺報『恵日』の編集担当のお話があったのは、平成六年十二月頃だったと思います。お話をいただいた時は、二十四頁立ての雑誌が、果たして毎月出せるかが多少不安にもなりましたが、パソコンはそこそこできましたし、すでに興風談所では本や小規模ながら寺報を作っておりましたし、困ったことがあれば談所の人たちにもご協力をお願いしようと考えお受けいたしました。

早速、大聖人の御真筆の中から表紙を飾る題号「恵日」のお文字を探すことからスタートし、全体のレイアウトを考えたり、執筆者を探して原稿を依頼したりと、慌ただしく年末年始と過ごしておりました。そんな時に起こったのが、あの平成七年一月十七日早朝の阪神・淡路大震災でした。

寸断された交通網に阻まれ、通常では飛ぶことのない岡山～伊丹間を飛行機で飛んで源立寺に来られたのは、地震から数日経った二十一日位だったでしょうか。復旧のお手伝いをしながら、とても寺報の発刊という状態ではありませんでしたが、住職に寺報のことをお聞きしたところ、一ヶ月は延期するけれども三月号から発刊してくれとのことでしたので、改めて創刊への意欲をかき立てられました。

そして翌二月二十五日、創刊号の版下は出来上がり、岡山から源立寺に持参してご住職に校閲していただき、印刷所へ出稿して、三月一日には記念すべき創刊号の発刊となったのでした。一時はどうなるかと思っておりましたから、刷り上がった『恵日』を手に取った時は本当にうれしく思いました。

以後『恵日』は、当初は源立寺が震災によって受けていた被害の修復にいたる過程を克明に記録することになり、今日に至っております。

この『恵日』作成の一ヶ月の流れを簡単に申しますと、まず初めは、第二日曜の御講のご住職の講話を録音することから始まります。

そして、テープ起こし。これは講話を手書き原稿にするのではなくて、直接パソコンのワープロに入力する作業です。現在は高槻地区の布江さんが、録音とテープ起こしを担当して下さっていますが、できない時は私が起こします。その時は、私が岡山の方におりますので、詳道師に録音していただき、それを送っていただくという方法をとっております。

布江さんが起こしてくれる時は、仮りのタイトルや小見出しをつけてパソコン通信で送っていただけますので随分楽をさせてもらっているのですが、このテープを起こしてパソコンに入力した原稿の量は、いつも『恵日』に載る原稿の約二倍くらいの量になります。それを恐れながら私が、話し言葉の冗長なところや重複等を中心に、胸を痛めながらも細心の注意を払って約めさせていただいております。一回校正して約めては印刷、また校正して約めては印刷、こういうことを何回かや

って、二十日を目処に源立寺にパソコン通信で送って、後は住職の最終チェックを加えていただくことになります。

この間、種々の原稿の締切が一応十五日になっておりますので、原稿が届き次第、順次パソコン入力を済ませていきます。

また、「恵日だより」の記事や行事予定・宅お講の予定等、また撮影した写真のコピー等は、詳道師のお手を種々煩わして、パソコン通信や郵便で興風談所の方へ送っていただいております。

大体二十日過ぎには、原稿等が集まってきますので、後は写真やカットの選定や割り付けですが、二・三日はパソコンの前に座りっぱなしで、試し刷りをしてはゴミ箱へということを繰り返し、源立寺へお伺いする日の前日までに、お講講話と巻頭言以外の版下を作成するようにしています。

源立寺にお伺いするのは、だいたい毎月二十五日ですが、ここで講話と巻頭言をいただき割付をし、すべて完成した版下をコピーして、最終的に全体のチェックをご住職にしていただき、OKがでましたら版下は完成ですが、完成した頃はいつも、もうとっくに日付が変わっています。

完成した版下を翌朝印刷所に出稿、印刷が出来上がって来てからの発送は、講員の方々にもお手伝いいただき、晴れて一日までには『恵日』がお手元に届くということになっております。

ある口の悪い先輩が、『恵日』が創刊されてまだあまり経っていない時でしたが、

「『恵日』いいねぇ、でも毎月大変だねぇ。いつ頁数が減るか楽しみにしているんだから、頑張れよ。」

と変な励まし方をしてくれました。それは毎月毎月出すのですから、それなりに苦しんでいますが、その先輩の励ましに答えるためにも頑張らないわけにはいきません。

亡くなった小説家の遠藤周作さんが、対談で「人生は苦る嬉しいものだ」ということを言っておりました。原稿の締め切りに追われる日々は、苦しくて苦しくて胃も痛むし、逃げ出したい時もしばしばなのだそうですが、よくよく考えてみると自分は小説を好きで書いているし、書くことに喜びも感じている。小説を書くことは苦しいけれど、反面自分にとって掛け替えのない喜びを与えてくれるものである。だから苦しいけれども嬉しい、苦る嬉しいものだ。小説だけでなく、人生も同じではないだろうか。というような話でした。

恵日編集について話す大谷吾道師

『恵日』の編集をそこまで大げさには言えませんが、この苦る嬉しいことを、少しでも嬉しい方に傾けてくれるのは、皆さんの投稿です。信仰所感・研究発表・ニュース・詩・俳句・短歌・随筆・手記・紀行・写真・カット・暮らしの知恵等々、いろいろなジャンルの投稿をお待ちしております。

また、これはパソコンやワープロをなさる方にお願いしたいのですが、ご住職のお講講話のテープ起こしを、できる方がいらっしゃいましたらお願いしたく、お申し出いただきたいと思います。

これからも新しい企画等も含めて、『恵日』をさらに発展させ、住職の、全国の法華講の方々にも読んでいただけるような『恵日』にしたい、との理想に一歩でも近づけるように、皆様方のご協力を得て頑張っていきたいと思っております。

源立寺法華講会計報告書

自平成９年４月１日　　監査役　松井照雄
至平成１０年３月３１日　　会　計　太田勲　西　良子

収入の部		支出の部	
項　目	金　額	項　目	金　額
前期繰越金	1,792,236	御会式費用	207,319
講費収入	2,379,000	御誕生会費用	34,949
新聞代受入	1,427,400	御難会費用	44,100
受取利息	3,502	御宝前御供物	24,710
寄付金	200	他寺講師御供養	206,580
雑収入	11,725	寺院補修費	25,267
		源立寺火災保険	93,640
		正信連合会分担金	355,200
		法華講総会費用	24,385
		法華講活動費	100,250
		講中備品代	1,638
		新聞代支払い	1,427,400
		積立金預入れ	0
		印刷費	14,880
		郵送費	30,840
		慶弔費	265,750
		雑費	630
		次期繰越金	2,756,525
合　計	5,614,063	合　計	5,614,063

恵日だより

お知らせ・ご案内

◎八月棚経のお知らせ

今年も八月初旬から例年通り、棚経まわりを予定しています。日程表は七月下旬までにお届けしたく思います。ついては今年、特別な事情のある方は、早めにご連絡・ご相談下さい。

また毎年、初盆の家庭は原則として、十二日から十五日の期間を予定しています。日程、飾り付けなどは、お寺までお問い合わせ下さい。

◎一泊研修会について

興風談所での一泊研修会は、再検討の結果、諸般の事情から今年は中止します。

なお、十一月二十八・二十九日の土・日に、和歌山県の加太国民休暇村にて、南近畿法華講連合会で主催する一泊研修会があります。源立寺からは約三十名の参加募集が予定されています。こちらの研修会に是非ご参加下さい。

婦人部総会のご案内

皆様お元気でおすごしでしょうか。いよいよ婦人部総会が近づいて来ました。

本年は、日蓮大聖人様が女性信者の方々に送られたお手紙を中心に、少しでも大聖人の教えを学ぼうと相談致しました。

教学の苦手を表に出して、それでも少しずつ各人が勉強したメモを持ち寄り、それをもとにグループでまとめました。

皆様もよくご存じの御書ばかりです。ごいっしょに勉強いたしましょう。

おさそい合わせの上、ご参加ください。

記

日　時　　平成10年7月19日（日）
　　午前10時より～おひる迄

ところ　　源立寺本堂

内　容

※　勤　行

※　御書拝読

※　まとめの発表

★　新尼と大尼の信心

★　船守弥三郎夫妻と大聖人

★　日妙御前

★　富木尼御前

※　住職ご指導

※　その他

【文月詠草】

〔橋本 義一〕

実験を　尚も止めざる　核保有国
抑止力とうは　蛙の面に水

〔橋本 圓子〕

もの言えず　寝たきりの戦友　見舞う吾に
「もう帰るのか」に　家人驚く

東大寺　転害門に　ほど近く
年々訪いし　乳母里ありき

幼日の　われに寄り来し　奈良の鹿
いま餌請うは　その末ならずや

【恵日俳壇】

〔宮下 留代〕

梅雨の降り　法華講総会に　集ふ群
目覚めれば　紫三つ　梅雨に濡れ

※※※七月の行事※※※※※※

一日（水）　午後二時　お経日

五日（日）　午前八時　講中勤行会・幹事会

七日（火）　午後二時　広基寺お講

十二日（日）　午後一時　お講・役員会

十三日（月）　午後一時　お講

十八日（土）　午後二時　教学研鑽会

十九日（日）　午前十時　婦人部総会

二十六日（日）　午後二時　法華経講義

※七月一日の継命新聞の発送は
『蛍池・服部』が担当地区です

今月の宅お講

十七日（金）　午後一時半　服部地区（芝野ハルエ宅）

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします
締め切りは、毎月二十日です。

恵日

平成十年七月号　通巻四十一号
平成十年七月一日発行

編集兼発行人　菅野憲道

発行　恵日編集室

〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一－三一三五
E-Mail：genn@wombat.or.jp
BBS：PXH05170（NIFTY）　BMC92733（PCVAN）